

八木重吉の短歌(二)

三、島田とみへの恋情

西村成樹

次に、短歌の大部分を占める島田とみへの恋情の歌について取り上げる。「日記2」の大正一〇年九月二二日にはやくも恋の歌が書かれている。

「恋」こそはみにくきなれがおもふだに
おろかしおかしなどわすれざる

醜いお前が恋をするのは愚かなことだから忘れよと言っている。この恋の対象は当然島田とみであろう。「日記2」の続く大正一〇年九月二五日の箇所にはとみへの手紙の下書きと推測される文章があり、恋愛感情が綴られている。『八木重吉全集』（筑摩書房）の年譜には、「九月、島田とみに手紙で愛を告白する。」とあるので、その交渉の中での一通であろう。一部分を引いておく。

——富子さん

私は打ち震ふ胸と手であなたからの小さい封筒を切りました、小さい——けれども、此の世のどんな外のものよりも私にとって尊いものです、嬉しいものです、

(略)

懐かしい想出の種となった、池袋で、一所に勉強した、あのとき、私は、不思議な魅力を感じました、あなたの額はあの希臘の彫刻に見る聡明さがあらわれてをりました、あなたの静かに静かに澄んだ瞳は波跡す

らない森厳な湖のように、限り無い神秘と、悲しさを物語つてをりました、そして、あなたの唇は！ あゝ、私が忘れようとして忘れ難いのはその美しい、けれども哀しさに充ちあふれたその唇であります、

(略)

その時以来美しく哀しげな少女として、信仰に生くる(私は自分でそう決めてしまひました)少女として、あなたは、丁度天使のように私の追憶から一日も去りませんでした、本当にあなたは天使です、(以下略)

文面から判断すると、重吉がまずとみに付け文をして、それにとみが返信したことに対して、さらに再び重吉がとみに送ろうとした手紙の下書きであるように推測される。「池袋で、一所に勉強した、」とは東京高等師範学校卒業頃に重吉が住んでいた池袋の下宿で、島田とみの受験勉強を見てやったことをさす。その時以来、とみの美しさに魅かれて、忘れられなくなつたと書いてある。一週間した会つたことがなく、また相手の一六歳という年齢を考えると、このような熱烈な手紙は避けるべきだという迷いもあつただろう。時期が少しあとになるが、「日記3」の大正一〇年一月四日には「師」といふ立場を利用する不埒な奴だ！という自責の言葉が書かれている。そのような思いが先の短歌の《なぜ恋を忘れないのか》という言葉につながっているのではないだろうか。この手紙が差し出されたのかどうかはわからないが、以後日記にはとみへの恋の歌があふれている。

1、あまりにもおのれがこゝろはげしくて

めしひもせるや君の恋はるゝ

2、あめつちは君がやさしいきいぶぎのみ

いるゝがためにつくられたるや

3、野の菊よ、なはしほらしくうちえめど

わが恋ふひとはいよいようるはし

4、みやこてふ

(以上「日記2」大正一〇年九月二十七日)

その名はよろし

きみすめば

みやこの名こそうるわしきかな

〔日記2〕大正一〇年九月二九日

1は恋しくて盲目状態になった、2は天地は君の息吹（生命）を入れるためのものだ、3は野菊はほほ笑むが恋人はますます美しい、4は君が住む都は美しい名だ、と他愛もないことを歌っている。星菫調のロマンチックな短歌である。これが次の短歌になるともう少し熱がこもっている。

1、「悟り」こそうとましき名ぞ

もえもえてわがたまゆらよ皎とかざやけ

2、聖書よむわがむねいまはなどもえぬ

「ぬるき」はおのがこゝろなるらし

3、赤き血を、わがむねさきてあかき血を

たれにさゝげんかの音かなしも

（以上「日記2」大正一〇年一〇月二日）

4、生か死か、君かあらぬかくるほしく

くるへるわれは祈るが怖ろし

〔日記2〕大正一〇年一〇月七日

1は下の句で私の心の瞬間（たまゆら）よ、燃えて明るく輝けと言っているが、上の句で「悟り」（宗教）はうとましいと言っているのが目を引く。また、のちの詩集『秋の瞳』（大正一四年、新潮社）の有名な詩「皎皎とほつてゆきたい」にも見られる「皎」の字が使われている。2は聖書を読む私の胸はなぜ燃えないのかと言っている。3は情熱の赤い血潮を誰に捧げようかと言っている。与謝野晶子の歌の影響を感じさせる。「かの音」

とは、日記の上でこの歌の前に置かれている二首の短歌に出てくる港の汽笛を指している。4は恋しくて狂おしいと言っているが、下の句の(神に)祈るのが怖ろしいという表現は注意すべきだろう。これらの短歌からは、明治の詩人・歌人の島崎藤村や与謝野晶子が宗教よりも恋愛の情熱を重視したのと同じ考えが見て取れる。(ただし、後述するが短歌の中でこの考えは二転三転して揺れ動いている)。しかし、恋の情熱を明るく楽天的に表した歌は非常に少なく、恋の短歌の多くは独り身の孤独や、相手の薄情さを嘆いたものである。重吉の短歌は全般的に苦悩や孤独や不如意などの否定的な心情を歌うことが多い。

- 1、月見草やみにさくがにみづからを
たとふるきみはつめたき少女

〔日記2〕大正一〇年九月二七日

- 2、あるときはつめたききみがみこゝろに
あきらめに似しきびしきおぼゆ

〔日記2〕大正一〇年九月二八日

- 3、人形にこひするごとしわれはしも
おかしきことのきわみならずや

〔日記2〕大正一〇年九月三〇日

- 4、きみがふみけふもきたらずみづからが
まづふがひなくおもわるゝのみ

〔日記2〕大正一〇年一〇月二日

- 5、夕ぐれはたえがたきさびならひとて
けふもつれなききみなどおもふ

〔日記2〕大正一〇年一〇月一日

6、うたうにはあまりにふかきうれひなり

さあれもだすはたえがたきものを

〔日記2〕大正一〇年一〇月二二日

1は夜の闇に咲く月見草のように自分を喻える冷たい少女と言っている。先の重吉の手紙の下書き（大正一〇年九月二五日）には「月見草のような少女！ あなたは、自らをこうたとへられております、バラの華さのない淋しいけれど、それよりも幾倍美しい月見草のような少女！ そうです、これこそ、私が第一にあなたから受けた印象であります、」と書かれてあり、重吉がとみを月見草に喻えているのがわかる。2は冷淡な君の心に寂しさを感じた、3は返答しない人形に恋しているようだ、4は君の手紙が来ないので自分がふがいなく思われる、5は夕方はいつも寂しくて不人情な君を思っている、6はあまりに深い悲しみだが沈黙するのは耐えがたい、と詠んでいる。重吉は頻繁にとみに手紙を書き、またとみからの返事を期待していた^様よう^で、4の歌にはそのような事情が表れている。これらの短歌はいずれも相手の薄情さ・冷淡さに対して恨み言を述べている。常識的に考えれば、唐突に恋文を送っても年若いとみに恋の火がともされる可能性は低いだろうが、性急できわめて内省的な重吉にはそれを顧みる余裕はなかったのだろう。逆にいえば、重吉のこのような一つのことを思いつめる性質、内省をきわめる態度が、のちの詩の独自の純化されたスタイルの形成へとつながっていったのだろう。

さて、先に宗教よりも恋を重視する短歌（大正一〇年一〇月二、七日）を取り上げたが、その後ほどなく宗教と恋を同一視する短歌も書いている。

祈るべきころときみをおもふさへ

ひとつなるらしこのみち尊し

〔日記2〕大正一〇年一〇月一七日

神に祈る心と君を思うことは一つであるようだ、この道は尊い、と言っている。^様この短歌では、神を絶対的なも

のとして崇めること（帰依すること）と、君を憧憬することが一致している。続く「日記2」の大正一〇年一月二二日の箇所には、「神を求むる二つのソウル、天の愛と、地の愛を、二人の胸にしっかりと抱いて、をることさへ出来たなら、それ以上何がいるだろう！」と書いている。重吉ととみの二つのソウル（靈魂）が天上の愛と地上の人間の愛をしっかりと抱いて生きることを願っている。崇敬の対象は神と人間（とみ）というように異なっても、重吉の中では愛するという行為は同じで差異はないという考えであろう。ところが反対に、先の短歌とこの記述の間の大正一〇年一月一九日（「日記2」）には

絵をかくも聖書をよむも

おどらざるわがこゝろわも死したるかなや

という短歌があり、信仰に身が入らないようすを描写している。また、「日記3」の大正一〇年一月六日には

「あの頃は、

さびしかった

——けれども、つよかった

弱さのうちに

あるつよさを感じてゐたんだが……

恋もない、

冷いその日その日であった——

武蔵野の赤土の土手にもたれて、

ただひとり

「神」をおもひ

「祈り」をすべとして

泪をたゝえたまなこで

ゆきずりの人をもみおかつたのに

(略)

そうして、

あなたの瞳は

いつのまにか

わたくしの

こゝろのいちばんおくに

しつかりとやどつてゐました

(略)

わたくしは

あやしいもだえをしりました

せつなさが

いく夜も

わたしをねむらせませんでした

(略)

神のみ姿は

やゝにとほく

きみのすがたを

みうる日とてさだかならぬ

いらいらしい

呪われた今日このごろ……………」

という記述がある。以前は神を思い、祈りをすべとしていたのに、あなたに恋してからはあなたが私の心の奥に宿り、神の姿はやや遠くになった、と嘆いている。この記述も信仰がおろそかになっていゝこと示している。

ところがまた反対に、内藤卯三郎が重吉ととみの結婚について尽力している頃の「日記4」の大正一〇年一月二六日の箇所には「信仰を捨てよ！冗談ぢやありません、それは生命を捨てよといふとおなじです、丁子（注、とみを指す）を捨てよといふと同じです、信仰あつてこそ丁子を愛し得るのではありませんか、信仰によつてのみ純潔に結び付き得るのではないか、」と書いてあり、信仰と恋の両立を願つてゐる。

以上のように、重吉の中で宗教（信仰）と恋愛の問題はかなり揺れ動いており、どちらか一方にあるいは両方に定めることは、少なくとも結婚前にはなかつたと言える。（ちなみに、とみとの婚約（大正一一年一月）が成立したあとの大正一一年五月五日（「日記4」）には、「自分は、自分の周囲の人すべてに、キリストの説いた愛の心で接したい、そうすることによつて、より一層純一に富子を愛し得るようになれると信ずる、」と書いてゐる）。神とちがつて、とみは手を伸ばせば触れることのできる生身の人間である。信仰と恋の揺れ動きは、恋人を何としても手に入れたいという利己的な欲求（愛情？）と重吉も無縁でなかつたことを示しているのではない。鈴木亨氏は重吉ととみの結婚を「てい、いい掠奪結婚である。」と評している。このような日記や短歌からは、信仰と恋の一致を願ひながらも、人間の本能としてのエロスに衝き動かされた重吉の姿がかいま見える。

さて、重吉の恋の短歌の特色の一つに自己を価値のない人間、とみを価値のある人間と述べてゐる点がある。そのような短歌、記述を挙げてみる。

- 1、君おもふあたしいしあらばなにごととも
むさぼりねごうことさらになし

〔「日記2」大正一〇年九月二七日〕

2、あたひなきわれはも土にひたふして

謝すべきことがひとつのみちか

〔日記2〕大正一〇年一月一〇日

3、あゝ、私は、どうか、きまりをつけねば、このまゝで続けていくことが苦るしくなりません、価値無い、私は、とうに、あなたから去るのが本当だったかもしれませんが、

〔日記2〕大正一〇年一月一二日

4、明るい

未来を予想することができぬほど、

みづからの

価値無いことをまづおもひます

〔日記3〕大正一〇年一月三日

5、すくわるゝあたひしなきが

いまさらにおそろしかくもかたよれるわれ

〔日記3〕大正一〇年一月二日

6、とみ子は、もちろん

わたくしにはあまりにもきよい、

あまりにあたひたかい女性であります

わたくしが

それにworthyでないことは

みづからおもひます――

だのに

——わたくしはおもひ切れないのです

神さま、わたくしの

悔いが、もし

あなたのみ心をうごかすことができたら、どうぞ

このおねがひをおゆるしく下さい

——わたくしは、

何の価もないものです、

ただただ

あなたのみゆるしによつてのみ生きうるものであります——

(「日記3」——朝と夕への祈り——

大正一〇年一月一三日と推測される)

7、 価なき男

女々しい男

甲斐性のない男、

あなたは、

あまりに、 値たかすぎます、

——だのに

なぜ——あゝなぜ、

その、あなたが

忘れられないのでせう？

〔日記3〕大正一〇年一月二五日

これらには繰り返し自分に価がないと書かれている。これほどまでに自己卑下する理由は具体的には書かれていないが、まず一つには5の短歌に述べられている偏った自己の気性が原因であると推測される。5の短歌の前にはあの友、この友と分け隔てをする偏った自分の心を嘆く作品が置かれている（「かのもとと、このともわかつゝかたよれるおのれがこゝろかへりみはせど」）。内面的には好悪が激しく、気位が高いという重吉の気質的欠点が、価いなしという言葉につながっていると考えられる。二つにはこちらの方がより根本的な原因だろうが、1、3、6、7の短歌、記述に見られる自己ととみとの対比が価いなしという思いを生じさせていると考えられる。6、7ではとみをそれぞれ「あまりにきよい／＼あまりにあたひたかい女性」、「値たかすぎます」と表現している。とみを崇高な存在として設定した時、自己の卑小さ、通俗さ、欲深さが感じられて、『価いなし』につながったのだろう。しかし、とみの一六歳という年齢と、重吉ととみは一週間しか会っていないということと考えると、とみは価い高い、重吉は価いなし、という対比は少し奇異な感じがする。重吉は大正一〇年当時二三歳で立派な社会人である。年下の少女を価い高いとは言いすぎではないだろうか。それにもかかわらず、とみを理想的女性として持ち上げたのはやはり現実に対する嫌悪感が原因なのだろう。重吉が教職（日常生活）に強い不満を抱いていたのは先に見たとおりである。学校の現実世界を忌避する気持ち強いあまりに、恋愛という理想世界に憧れ、観念の中で過度にとみを美化・神聖視していったのだろう。皮肉な言い方をすれば、重吉は自分で作り上げたとみの虚像に恋をしていた面もあるだろう。そして、夢のない濁った瞳の生徒、卑俗な同僚たちは遠ざけられて、うら若いとみは「あまりにきよい」乙女として神聖視される。ここには年端のいかない者の童心・稚気・未成熟を純粹で汚れないととらえる考えが潜んでいる。重吉は「日記2」の中で、「幼き君よ、あなたはほんとうに幼い、けれど、あなたは、私が、火のようなおもひにもえてゐることを、ちつとも御存知ないのでせうか？」（大正一〇年一〇月一二日）と書いている。幼さやあどけなさは必ずしも純真無垢と一致しないだろうが、このとみの幼さが重吉には純真さ、清らかさ、汚れのなさに映ったのだろう。そして、このような日記、短歌に見ら

れる童心と清らかさの同一視は、のちの詩作品「鞠とぶ⁴り、きの独樂」等の作品へとうけつがれていく。

さて、大正一〇年の夏頃から重吉の依頼を受けた内藤卯三郎の尽力によって、大正一一年一月には重吉ととみの婚約が成立する。結婚はとみが女子聖学院を卒業する二年後という約束だったが、とみが肋膜炎に罹ると、重吉はとみを中途退学させて、七月に結婚してしまふ。これは重吉も当時肋膜炎に罹っており、結婚できなくなることを恐れたためと見られるが、かなり強引で性急なやり方である。「日記4」（大正一〇年一月二五日）大正一一年六月五日、「日記5」（大正一一年六月六日）大正一一年七月一四日）にはこの頃の心情が書きとめられている。田中清光氏は『詩人八木重吉』（麥書房）の中で重吉がとみとの結婚を自身の家族から反対されていたことを次のように書いている。

当時は本人が恋愛し自分で結婚の相手を選ぶなどということは、とくに農村出身者（稿者注、重吉の生家は富裕な農家だった。）にとつては常識を脱した行爲とされていた。生家の許しを得ようと努める重吉は、当然強い抵抗に出会うのである。とくに長兄は、思いも設けぬ話に反対した。家と家の繋がりの結婚がすべてに優先していた時代である。「そんな遠い国の身元の判らぬ人」と考えるのが農村社会の常識であった。また、「日記4」の大正一一年一月二四日の前の箇所には

追放の児！

『愚か者！』——と、

兄が

姉が

弟が

叫んでゐる——、

弱き者、

理解されぬもの、

淋しきもの、

まよへる者、

とみさん、

あなただけは、

いつまでも味方ですね

いつまでも、いつまでも、

と家族から理解されないことを嘆いている。しかし、家族の反対はあつたものの、婚約後重吉ととみの関係は進展していった。右の記述のあとには、

キスのおもひで――

この唇に！ さなり

この唇に、かの日には

くるほしきさま――

とあり、続く一月二四日の日記には

かの日のくちつけ

きみがさびしき笑まひ

くるほしき抱擁！

あゝそがおもひで――

とある。また、大正十一年一月九日付のとみ宛書簡には「又しても、かの夜のことが、幻影となつて、現れます。

横浜の夜の海辺！ しつかりと握り合つた、手から手へ、お互ひの熱い血が、伝はるやうにさへおもわれた、ベ
ンチの上での握手。」とあり、さらに、大正一一年一月二日付とみ宛書簡にはとみに写真を依頼して「うつつ
ときは——澄ましちや駄目。頗る平気ですとのです。なるべくなら、あの夜（七日の）、月光をあびて小さい流
れのほとりでの、初めてのキスのことでも考へながら——。」とある。これらの記述を見ると、婚約後の二人に
は多少の肉体の触れ合いがあつたと推測される。それに応じて、日記、短歌にはとみを妻と呼ぶ記述も見られる
よようになる。

富子！ 富子！ 感謝するよ、感謝するよ、富子は、偉い女だ、めづらしい少女だ、勿躰ない位な妻だ、

〔日記4〕大正一一年五月七日

泪するその日はきたりわが胸に

きみなんだせよわきわがつま

わが妻よわれわもきみもひとりぬる

この二百里のかなしからずや

〔以上「日記5」大正一一年六月二日〕

あめつちにひとりの妻よいまものちも

ひとりの妻よいまだ癒えじとや

〔日記5〕大正一一年六月二三日

最後の短歌の「癒えじ」とはとみの肋膜炎が治癒していないことを指すのだろう。また、恋を謳歌する歌も少し
だが作っている。

きみあれば、恋はよきかな

さらば、酔はん、若きいのちに

なみださへ、あまきなんだぞ

恋しれる、われにつぐるな、にがきよそこと

(以上「日記5」大正一一年六月六日)

いずれも明星調のロマンチックな短歌である。そしてさらに、性愛を歌った短歌も見られるようになる。

1、抱きたき抱かれたかる身二つの

なごけふかくはとほく嘆くか

2、きみゆえにわが童貞のたもたるゝ

うれしくさびし遠く山みる

3、かの日にはきみを抱くをなにごとか

いやしきことにおもひてありしが

4、ひととせのいまはもきみがやわらかき

肌はだにふれぬを足らわじとおもふは

5、きみといふひとの肌はだのくまもなく

われにゆるせとせちにねがわる

6、きみにしてうるはしからぬ肌はだぞと

いふべきあらじゆるせすべてを

(以上「日記5」大正一一年六月一三日)

7、七月の真昼の涙はなまめきて

きみあらばわれきみを抱かん

8、薄衣うすぎぬの女おんなの肌はだなまめきて

きみを抱かん日をおもふかな

(以上「日記5」大正一二年七月一四日)

1はお互いに抱かれたがっている自分たち二人の身の上を嘆いている。2は君と結ばれるために童貞を保っている嬉しさ・寂しさを、3は君を抱くことをなぜか卑しいと思つていたことを、4は一年後の今君の肌に触れないことが不満足であることを、歌っている。5、6は私に肌を許せと言っている。7、8は君への肉欲を歌っている。以上のような記述、短歌を見ると、婚約後、重吉の愛がよりリアルなものへと推移していく経過がわかる。しかし、一方で重吉は「けれど、私等は、完全に純潔であつた。いつまでも、そうであらう。その日の来るまでは、お互ひに絶対に自重せねばならない。」(大正一一年一月九日付とみ宛書簡)と書いている。明治三一年生まれの重吉にとつて、男女関係のつましさは社会一般の常識だつたのだから。そして、7、8の短歌のあとは「日記5」には一〇首しか短歌はなく、日記も短歌も実質的に終了している(最後の「日記6」は大正一一年七月四日から七月九日までのもので短歌は含まれていない。重吉は七月一九日にとみと結婚している。)

注1、重吉は頻繁にとみに手紙を書き、またその返信を心待ちにしていた。「日記2」には

「さびしい!／＼どうしてもさびしいなあ、／＼けふもたよりがない、どうしたのだから?」(大正一〇年一〇月二七日)とあり、またとみ宛書簡には「手紙もなるべく多く書くのですよ。よいですか。そして私のこれからの手紙を焼きすてたりしたらいけません。新しい生活に入る日の記念に皆お互ひにとつてしまつておくことにしよう。」(大正一一年一月九日)、「この手紙は、なつかしい写真の受取状にすぎません。またすぐ書きます。富さんの方からも出るだけ多くお手紙下さい。」(大正一一年一月一日)、「余り度々手紙を上げるのは、かへつて、病氣(注)、とみの病氣を指す。)にさわるかとも、思ふけれど、どうしても、書かずにはゐられぬ故、今日も、ついペンを執つてしまった。」(大正一一年一月一日)、「富さん、僕は、富さんの手紙ばかり待つてをるのだから、書けるなら、書けるだけ、なるべく多く書いて、度々よこしてください。」(大正一一年一月二日)とある。

注2、この短歌は、《祈るべき心の持ち主であると君について考えることさえ、一つの道であるようだ、この道は尊い。》という解釈も成立するが、その際でも祈り(宗教)と恋が同一視されていると言える。

注3、鈴木亨「八木重吉の人と作品」(『八木重吉詩集』白鳳社所収)による。ただし、引用は『八木重吉文学アルバム』

筑摩書房によった。

注4、重吉の未刊の詩稿『鞠とぶり、きの独楽』（大正一三年六月一日。重吉は書きためた詩に表紙、表題を付けていくつもの詩集として保管していた。）には、子供（童心）を神に近い存在としてとらえた作品や記述がある。

憶え書

鞠とぶり、きの独楽 及び それよりうへにとちてあるのは皆 今夜（六月十八日夜）の作なり。これ等は童謡ではない。むねふるへる 日の全まをもてうたへる大人の詩である。まことの童謡のせかいにすむものは こだもか 神さまである。

○

てくてくと

こだものほうへもどつてゆこう

○

きりすとさまをおがんで

こだもの

ふところにゐれば まちがいはない

○

こだもがよくて

おとなが わるいことは
まりをつけばよくわかる

○

あかんぼが

あん あん

あん あん

ないてゐるのと

まりが
ぼく ぼく ぼく ぼくつかれてゐると

火がもえてるのと

川がながれてるのと

木がはえてるのと

あんまりちがわないと おもふよ

○

こども

こどもは

なぜ えらいかといへば

天国にちかくゐるからだ

じっさい

えんぜるがぢきそばにあそんでる

うそではない

おとなとは せかいがちがふ

ものがみんな溶けてゐるせかいだ

「こどもがよくて／おとながわるい」「こどもは「えらい」「えんぜるがぢきそばにあそんでる」「おとなとはせかいがちがふ」という言葉には大人を低く見て、子供(童心)を神のように礼賛する考えが読み取れる。

今高義也氏は重吉の長女桃子(大正一二年五月二六日生まれ)と長男陽二(大正一三年一月二九日生まれ)の誕生が、『こども』の無垢なる世界への開眼を促したとし、さらに『こども』の世界は、まさに重吉が求めていた「ひとすじ」なるものが生きている世界であった。重吉はそこに、ひたすら一心に(神を呼び求める)あるべき人間の姿を見出したのである。』(『八木重吉とキリスト教 詩心と「神学」のあいだ』教文館)と述べている。

主要参考文献

- 『詩人八木重吉』 田中清光（麥書房）
『八木重吉文学アルバム』 田中清光編（筑摩書房）
『八木重吉とキリスト教』 今高義也（教文館）
『詩の宇宙 重吉 暮鳥 元吉 賢治』 藤原定（皆美社）
『日本近代詩とキリスト教 佐藤泰正著作集10』 佐藤泰正（翰林書房）
『日本の詩歌23 中原中也 伊東静雄 八木重吉』 伊藤信吉他編（中央公論社）
『日本詩人全集18 中勘助 八木重吉 田中冬二』 亀井勝一郎他編（新潮社）
『花と空と祈り 新資料八木重吉詩稿』 吉野登美子他編（彌生書房）
『琴はしずかに 八木重吉の妻として』 吉野登美子（彌生書房）
『八木重吉 詩と生涯と信仰』 関茂（新教出版社）
『八木重吉詩がたみ 祈り』 四竈経夫（宝文館出版）